# ソフィアの大木にて

鷹野こえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソフィアの大木にて

【Ｎコード】
Ｎ４８５８Ｅ

【作者名】
鷹野こえ

【あらすじ】
女尊男卑を唱えるその世界の知性を誇りとする国に「ソフィアの大木」と呼ばれる世界一の図書館がある。奇しくも僅か１８歳という若さで司書となった天才、エマ・セシルの話。

# 序章

私達が生きる今の時代では男女平等が唱えられている。

しかし、その世界では大昔から女性が優位にあると考えられている。たとえば各国を治める王は全員女性であったり、様々な宗教内で崇められている神々は女性ばかりだったり。ホテルやデパートなど施設の名前に女性のものが用いられることも珍しくない。

そう、そんな中、誰もが知っているくらい有名で素晴らしいと評価をもらっている建造物に、「ソフィアの大木」という図書館がある。外観は文字通り大木だ。ゆうに縦２００メートル、横３００メートルはある。ざわざわと揺れる葉を見上げていればすぐにでも首が痛くなってしまう。

入り口はざっと１０はあり、世界中から集まる人々が混雑しないため、広く作られている。

そこにはありとあらゆるジャンルの、言語の、厚さの、大きさの、価値の本が置かれている。堂々の世界一。

先程も言ったように、世界中から多くの人々が駆けつけるほど素晴らしい図書館である。ソフィアとは知恵という意味の女性の名前だ。「ソフィアの大木」には、豊富という言葉では足りないくらいの英知が詰め込まれているのだ。

知恵は誇り。

勤勉で知的な人ばかりのその国を、人は賢者の国と呼ぶ。

その国で王となるのは代々最も賢い女性だった。道徳的にも賢い女王。それを、この国の人は求め認めた。だからこそ血で決めること

はなかった。全員が正しい女王であった。女王になる瞬間、その大賢者の名はソフィアとなり「ソフィアの大木」の司書長にもなる。

何世紀も前からある誇りに、国民は自然と憧れを抱く。ほとんどの者が大木で働く司書を目指す。とてつもなく難解である試験に何度も挑戦し、やっとの思いで受かったときにはどんなクールな人でも飛び上がって喜ぶ。

さて、こんな司書という仕事に最年少１８歳の天才が就く事になったらどうなることだろう？

これはその世界を震撼させた若き司書、エマ・セシルの物語。

## 1（ソフィアの本）

エマが任せられた1番始めの仕事はこうだ。
大体の本のチェックをすること。

お喋り好きで噂好きのデータマニアであるヒュー・コリン――31歳の男性司書で、夏の空のように濃い青色の目をしている――が言うには、誰もがまず通る道なんだそう。それはこの図書館がどんな所かしっかり理解してほしいからだとか。

「まぁ、1年かかった人もいるけど頑張ってね。」
コリンはにこやかに言いのけた。「すっごく面白いよ、うん。大変だけど。」

エマはぱちぱちと目を瞬かせ聞き返した。
「1年？」
そう、と男は深く頷き紅茶を啜る。実に美味しそうに飲む。

コリンはデータ収集を目的として、新人に「ソフィアの大木」の司書のみが歩きまわれる場所　を案内する役割を受け持っている。さっきまで案内してもらっていたところだ。今は、「司書控え室ーA」でお茶を頂いている。彼は気さくに話しかける。

さて、エマの落ち着いた様子を一通り眺めたあと（観察したと言った方が正しい、とエマは思った。）、「大体の本っていうのは、」コリンがゆったりと続ける。
「ちょっとばかし手を焼く本、ということだ。」
「手を焼く本。」
エマは自分の声が、自分しか気が付かない程度に喜びに震えるのを

感じた。
「そうだ。」彼は頷き、目を細めた。確信を込めて一応きいてくる。
「この図書館に、他とは違う本があるとは知ってる？」
その本たちと出会えることを1番楽しみにしていた。
思わずそう口に出してしまいそうだったが、ぐっと耐えた。彼女は自分の感情が表に出ることをあまり好かない。
もちろん、知っている。意思表示に力強くぐっと首を縦に動かす。

「本とは知識の箱だ。」
世界最高峰の学校、マチルダ学院で教授がそう言っていた。
「知識は生き物だ。本はそれを我々に届けて頭の中に住まわせるものだ。箱の形は作者が作り上げたものだから気をつけると良い。箱をうまく開けれないと、間違った解釈を持ってしまう。さて、知識は生き物だと言った。生き物とはひどく厄介なものだ。そして力溢れるものだ。力は時に、ある枠を飛び出してしまう。それは我々の知る常識であったりする。」
教授は優秀な生徒達を見渡してから、セシル、と名を呼んだ。
「ソフィアの大木にはどんな常識を超えた本がある？」
「文字が蠢く本、望むままに大きくなったり小さくなったりする本、絵や写真が動く本、光り輝く本、水の中でしか読めない本、異空間へ飛ばせる本、持った人の気分で表紙の色が変わる本…様々なものがありますが、どれも私達が想像できないような素晴らしい知識が詰め込まれている本です。一般の人へは閲覧禁止になっており、司書の資格がある人ではないと扱うことができません。」

## 2（ソフィアの本）

秘密の書庫へたどり着く手段は、今までの体験からいえば奇妙だった。エマは後からコリンにそう感想を述べる。

植物が人の意思に従い動くだなんて一般的には有り得ない。
だがここは「ソフィアの大木」であることを忘れてはいけない。
「人が想像し得ることは全て実際に有り得ることである」
某哲学者の意見に賛成している立場からすれば、例え丁寧に頼み込んだら枝が退いて秘密の書庫に繋がる扉が表れたとしても充分予想内の範囲だった。

５冊は本を読んでみるといいと思うよ。
手を振って出ていったコリンを見送り、興味のある本に手を伸ばす。
（といっても、エマにとっては全てが興味ある本だった。）意外と整頓されているものだから驚いた。どこをどう改善すればよいものか。少し乱れている所を整えて、本に没頭し始める。

エマとて知識欲に捕らわれてしまう考えなしではない。
天才独自の優れた勘が危険を知らせるものは避けて（例えば「異空間への粋な旅行記」。１年もかかったというのはこの本のせいではないかと思う。「暗い森のサーカス－愉快な異形の怪物達－」怪物達が”出て”きても可笑しくはないだろう。）結局、エマは「大賢者が残した大論文」を選んだ。

読む人によってはとてつもなく難しくつまらなく思えるだろうけど、彼女にとってはとてつもなく魅力的で素晴らしく思えた。少なくとも８ｃｍはある厚みと小さな細かい字はエマをうっとりさせた。

天才と奇人はいつの時代も紙一重である。

## 3（ソフィアの本）

「なんて素敵な空間なの…」

エマは半ば呆然と呟いた。その表情は、恍惚としている。

司書となり3日目。

1日目、2日目とも丸一日を秘密の書庫で過ごした。食事をするのも寝るのも忘れ、ただ本にのめり込み没頭した。

コリンが様子を見に来てくれなければきっと倒れていただろう。

実際に、エマは勉強ばかりしていて倒れたことがある。お母さんに呆れられた。その日以来、どれくらい集中していようがお母さんは栄養をとったり寝たりするよう促すようになった。

お母さんには本当にお世話になっている。

エマは素晴らしい知識達に囲まれている現実について興奮して痺れる脳内でぼんやり考えた。まさにそうなのだ。エマは昔から論文についてなど素晴らしい賞をもらってはいるのだが、直接的な親孝行をした覚えはない。いつも買って欲しい本があっておねだりしたり、甘えてばかりだったと思う。

エマにとって母親とは、そういう存在だった。助けてくれて頼りになって、つい甘えてしまう。

司書になったことを、お母さんは自分のことのように喜んだ。そのとき見た笑顔は「大賢者達の大論文」と同じくらい魅力的だった。

（エマにとってのこれは相当なものであることを知って欲しい）だからこそ、はじめの給料から彼女のために何か買おうと決意している。

物思いに耽りながら、エマは４冊目の「手の焼く本」を読み始める。

題名は「詠魂者（エイコンシャ）の栄光（エイコウ）」

詠魂者とは、対峙した者の魂を歌う者。

魂には予感や運命、つまり未来の予定みたいなものが表れているらしい。それを視ることが出来る奇怪な能力を持った人が居て――珍しい能力を持つ人がたくさんいる緑髪の国にしか居ないと聞いた――それを、より正しく伝えるには思うままに歌うことが1番だとか。それで、詠魂者。未来を歌う人、と呼ばれることもある。

詠魂の能力を持つ人は極々僅か。

なので未来を知ることはとても貴重だ。

つまるところ、詠魂者は各国が喉から手が出る程欲している。

隠れ潜み生きているのだから、詠魂者について知っているのはとても少なく好奇心はビンビンに振れた。

嬉々として読み出す。

本を開くその動作を読むというのならば、読み出すという表現で合っている。

開いた途端に淡く七色に光り輝いた美しさをなんと表現すべきか。

意識は暗転し夢の中。

## 4（ソフィアの本）

その奇妙な感覚を何と表現すれば良いのか。

そもそも、あれを感覚とは呼ばないだろう。

感覚とは外からの光、音、におい、味、寒温、触などの刺激を感じる働きと、それによって起こる意識のことを言う。ちなみに視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、更に温覚、冷覚、痛覚などがある。

果たして私はその時、目を開けていたのかどうなのか。体は上下左右不規則に回転していたような、してないような。とにかく落ち着いた感じはしなかったと思うのだけれど、それも今となってはうろ覚え。

エマは、驚きに目を見開くヒュー・コリンにそう話した。

彼女が話す“その時”に、つまり本を開いて七色の淡い光を見たと思ったその直後に、何があったのかを説明しよう。

先程述べたような摩訶不思議な現象のあと、いや、その最中だったのかもしれないが――何しろうろ覚えなのだから詳しく言えまい――確かに歌を聴き取った。

美しき　気高き　誇り高き

そして賢き彼女に従える　幼き其れ

乙女の恩恵に縋るる
心凍らす喧騒を　耳にしたらば
また　乙女の足元に縋るる
設えられた座を捨て
真実を信ず道を　唯進むのならば
繋がりは途切れず
美しさとは何処に在るのか
古から　宝物の在り処を知る
其処に美しさとは在ろうて
栄光は其れを照らす

思うに、これこそがきっと、詠魂。
気付くと本を開いた瞬間と寸分違わない体勢だった。
手元には本。真っ白のページが目に飛び込んできた。
ざっと見てみる限り、全てのページが白紙らしい。
表紙には変わらず、「詠魂者の栄光」と。
とんでもない体験をした。心身ともに震わせながら、エマはほとん

ど無意識に今きいた詠魂を口の中で反復し呟き、脳に覚えこませた。
天才であるが故の徹底さだ、とコリンは言う。
殆どの人があまりの衝撃に1度しか聞くことが出来ない詠魂を忘れてしまう失態を犯す。それをエマもコリンも知っていた。

エマは迎えに来た面倒見のいい先輩に、この話をした。
というより、珍しく素直に驚いた様子で呆然としていた後輩に好奇心を抱いたコリンが無理矢理聞き出したと言った方が正しい。

コリンはエマに負けないくらいに驚き呆然とした。
そして真剣な顔つきになり、こう忠告をする。
「その話、もうしない方がいいね。」
他の人には喋っちゃ駄目だよ。鋭い光を持つ瞳に、エマは気圧されつつしっかりと頷く。

「確かにあまり人に言う事ではありませんね」
「んー、うん。まぁそういうこと。」

曖昧に困ったような笑みを浮かべる目の前の男に、彼女はすうっと目を細める。

「何か喋ってはいけない理由があるんですか。」
「疑問系になってないよ…。うん、セシルには敵わないね。」
「あるんですね。」
「うん。例えばセシルの命を狙う人間が出てきたりする。」

……。

「何故？」

「人は嫉妬心を憎悪や殺意と勘違いしてしまうから。」
「…それだけ、ですか。」
「きょとんとした顔されてもなぁ。君が司書となった場合とは違うんだ。」

コリンは悲しそうに言った。
夏の空のような青い瞳に影が落ちる。

「詠魂に詳しくて、いやにこだわる汚い人間がいるんだよ。この世には。」

この時、彼は詠魂者関係で何かあったのだなと思ったのだけれどそれを訊ねるのは流石にはばかれた。

またいつか教えてあげるよ。だから今日はもう休みな。エマ。賢きお嬢さん。

その日以来、コリン――改めヒューとは良き友人となった。
共通の秘密は親しみを生む。

## ４（ソフィアの本）（後書き）

感覚についてはｙａｈｏｏ！辞書で調べました

## 5（蛙の子は蛙）

エマにとって、ヒューの存在はとても有難かった。
その理由は2つある。

1つ目に、彼が情報マニアであること。
交友関係が驚くほど広く、噂という噂をすぐにキャッチする。
誰々が誰々と付き合い始めたとか他愛のない話から
政府の誰々が浮気しているかもしれないだとか出世に関わる重大な話まで。

それだけに終わらず、新聞に載っている事柄について記者より詳しく知っていることもあった。
驚愕と感心を通り越し、何か薄ら寒いものさえ感じてしまったのを覚えている。
まさかヒューは詠魂者で、未来をあらかじめ知っていたのでは？
思わず疑ってしまう程に情報の回りが速いことも、彼の自慢だ。（あまり褒めると調子に乗るので言ってあげないけれど）

2つ目に、純粋に親しい友人が居ることが嬉しかった。
エマはあまり友人が居なかった。というより、不要だった。
全くいないわけではない。それなりに喋ったりもした。
けれど本当の意味で支え合い笑い合うような間柄の人間は、母親以外に居なかった。

そもそも正直に言うと勉強の方が好きである。
「友人と軽くお喋りしながら長い時間をかけする食事」より、「すぐに食べ終え図書館に向かい勉強する」方が時間の有効活用。そう考えていた。

今もエマは自分でその方がいいと思う。
けれど、「友人と軽くお喋りしながら長い時間をかけする食事」も悪くない、と感じる。

しかし、ヒューは大体、食事の時間も情報収集で忙しくしているから（目を輝かせ楽しそうに情報を聞き出す。変人だ）隣に座っている自分も多種多様な情報が聞けて得だったりするわけだ。

ときどき話を振られ答える。
共同戦線をはかり共に聞き出そうとする。
話をじっくり聞いている。

そんな距離感が、煩わしくなく好きだった。
ヒューは立派に大人で賢く面倒見もある為に、頼りになった。

頼りにし頼りにされる。

真の友情、と自己満足気味に思う。エマは、大切なものの事を考えるときの、贔屓目で見てしまうような頭の悪い自分が好きだった。

さて、そんなヒューに母の話をした。
彼は興味が湧いたならすぐ行動する。その話をした日の内に、夕食に相伴うことになった。

誰かを自分の家に誘うことは始めてだったので不思議にわくわく心が躍った。

ヒューがバスの運転手から情報を聞き出しているのを手伝っている間に家に着く。

セシル宅は存外に一般的であることを記しておこう。

「ただいま」と家に入った途端、よもやここまで驚くことになるとは思わなかった。エマは顔が引き攣っているのを感じつつ母に問う。

「なんで父さんが此処にいるの……？」

彼女は後ろで興味深そうに青い目を輝かせる男を、じっとり睨みつけた。

正面にいる男性は、ものすごく厄介な人物なのだとわかってほしい。

## 6（蛙の子は蛙）

「やあ、おかえりエマ。」
「…ただいま。何で帰っているの？」
「ハハ、そんな嬉しそうな顔しないでくれよ」
「誰が嬉しそうな顔なんてしてるものですか」
「やだなぁ照れちゃって。エマの恥ずかしがり屋さんっ」
「ウインクしないで下さい気持ち悪いです蕁麻疹でる！」

「僕、エマがあんなに嫌がってるとこ始めて見ましたよ」
「ごめんなさいねぇ騒がしくて」
「面白いので問題ありませんよ。」

ちょっと！少しは止めてよヒュー！

母の作った美味しそうなクリームシチューを目の前にして、エマは憂鬱そうに溜息をついた。丸い机を母、ヒュー、エマ、父の順番で囲んでいる。

「どうしたんだ？そんな顔して」
「黙ってお母さんの料理を噛み締めてください」

男は冷たいなぁ、と言いたいかのようにひょいと肩を竦ませた。
ヒューの好奇心に漲る瞳を受け止めつつ朗らかに微笑む。

この人は正真正銘、エマの父である。
情報マニアの鮮やかな問いに流された結果だが、とにかく彼女はし

ぶしぶ認めた。
（母はその様子をやけににこにこして見ていた。友人の存在が嬉しいのだろう。）

いつの間に仲良くなったのか、「ヒュー、そこのケチャップをとってくれないか？」「はいどうぞ」「ありがとう」家庭にありがちな光景を見た。なるほど、息の合う人達かもしれない。友人は自分がセシル家に溶け込んだのを見計らい（つまり、すぐにという意味だ）父に話しかけた。

「それで、訊きたい事があるのですがいいですか？」
丁寧に切り出す。エマは始まった、と天井を仰いだ。

問われた父は鷹揚に笑む。「構わないよ」

「まず、貴方の名前って何ていうんです？」
「ハハ！確かに名乗っていなかったな。失礼をした――アイザック・セシル。気軽にアイザックと呼んでくれ、ヒュー。」

「じゃあアイザック、さっきの会話から聞くとあまり家にいないようだけど仕事は何を？」
「もちろん日頃は家にいないさ」アイザックは悪戯っぽく言う。「俺は旅人だからね」
エマがフンと鼻を鳴らしたが無視する。

「旅人？」
ヒューは聞き返した。珍しい職種に違いないからだ。

旅人といって思い浮かぶのは、世の知識を貪り尽くす為のソフィア様御用達黒の旅団。

世界中を旅する、女王のお気に入りではあるが非政府的存在な学者達。
基本ユニホームを黒とする彼らを、黒の旅団と呼ぶ。

それしかないだろう。けれど到着したという話はまだ聞いていない。
どういうことかと訊ねる。

アイザックは言う。
――僕は間違いなく黒の旅団メンバーだよ。

## 7（蛙の子は蛙）

アイザックは旅団内で唯一の男性学者だそうだ。
というのも学者には他に女性しかおらず、同行している男衆はみんな用心棒だからだ。５人ほどいるらしい。

旅も一段落ついたため、国へ帰ろうとなったわけだが、女王ソフィアは早く話を聞きたがるだろう。
そこで男性学者であるアイザックは一足先に帰ってきた。

道中、危険なこともあるだろうけど、そこは女尊男卑のこの世だ。
男なら大丈夫だろ！行けよお前！と体よく使われたわけだ。

「一段落ついたって？」エマが口を挟んだ。「つまり、ソフィア様にはどんなお話をしたの？秘密事項？」
「いいや、すぐに君達には伝わると思うよ。民間人には秘密だが司書は特別だ。」
アイザックは複雑そうに眉を顰めた。
そして娘の顔をちらりと見て、ワインを一口啜る。
「ただ、エマはどうだろうね…。」

「それは私には伝わらないかもしれない、ということ？」
エマはすぐさま食い付いた。目をすっと細める。

ヒューはこの顔を何度か見た。
その目でじっと見据えられると、何でも従わなければいけない気になってしまうのを知っていた。

父が口を開く前にしっかりした声で言う。
「何かとっても危険だったり重要だったりすることがあったのね？」
彼女は意識的にハキハキと喋った。言葉を続ける。「２０歳にも満たない人にはいくら司書でも言えないような。」

アイザックはしばらく沈黙したが、重い口を開く。
彼女のまさに図星の考察の前で隠す事はできないし下手に嘘は言えない。そもそも嘘は言いたくない。ここは賢者達の国。真実でないものを嫌った。

ただ、
「明日を楽しみにするといいよ。」
とだけ朗らかに言い残し、そろそろ城に戻るよと言って母親の頬にキスをして出て行った。素早い動きだったとヒューは語る。

ちなみに言うと、頬にキスをする習慣はこの国ではもう滅びている。
祖父さんのそのまた祖父さんぐらいの時代に途絶えた。
エマはそのキザったらしい行動と癪に障る言葉に過剰反応し、（なんたって目の敵にする父親だ）「しばらく帰って来ないでよね」などとぶつぶつ文句を言った。

## 8（蛙の子は蛙）

「黒の旅団って相当頭良くなきゃ入れないんだから、エマの天才は血筋なのかな？」ヒューはエマのむくれた表情を見て慌てたフリをして言い直した。「もちろん、エマ自身の努力の賜物でもあると思うけどね」

彼女がアイザックを邪険に扱うのを知って、血筋だとか言い出す彼は度胸がある。

エマの母でありアイザックの妻である女性は、その様子を柔らかく笑いながら眺めていた。

若い頃、愛娘と同じ美しい茶色だった髪は色素が薄くなってきている。

危険に真正面から向かっていく愛しい人。

ただ、世界を知りたいが為に。

あの人の血を、あの娘は確実に受け継いでいる。

ソフィアに仕える人になったのだから。

ただ、世界を知りたいが為に。

こちらの気持ちも、少しは解ってくれるといい。なんて、少し拗ねたように考える。

「待たせられる方はいつでも心配してるのよ……　エマ・セシル。」

――“すべての星”の名を持つ子。

小さな呟きは、いつもより賑やかな食卓の宙に消えた。

翌朝、エマはいつもより早くソフィアの大木に向かった。
もちろん日課の朝学習、朝読書は抜いていない。

早起きしたのにはもちろん、理由がある。
自身の父が言った事が気になるからだ。

自分は立派に司書なのだ。エマは思う。
もう、正式な司書になってから2ヶ月になる。
仕事にも慣れてきた。

それなのに、若いからと理由にされるのは腹が立つ。エマにもプライドはある。

後、ヒューに頼み込んでこっそりと教えてもらう。

ヒューはエマが愚かでないことを知っていた。
それに、彼は賢い。
教えていい事と悪い事の判断は出来る。ヒューは教えてもいいだろうと考えた。

黒の旅団から報告されたことは、南の国、武力の国との戦争がある可能性を察知したことだった。

武人の国と、我ら賢者の国は仲が悪い。

私達から見ると南に住む血の気が盛んな彼らは「野蛮」であり、彼らから見ると私達は机にかじりつく「惰弱」な人間達だった。
理性的に解決することが英知の誇り。
強さで認め合うことが武力の誇り。
対照的であるからして、争わないのも難しく、昔から　バランスが悪かった。

それが近年、ついに確実に崩れるかもしれない。その可能性を黒の者達は感じた。

「何であれ、時代の節目にはあるものよね。」
エマは頭を振って言う。「私、今のソフィア様なら戦争があってもおかしくないと思うの。」
ヒューは窘めるように見遣った。「ソフィア様をバカにするようなこと言ってはいけないよ。」
「バカにしてるんじゃないの。」
落ち着き払って、彼女は言葉を続ける。
「ただ、あの人は確かにとても賢いけれど、野心家である性格は直らないから。」
「そうなんだよね。」
眉根をぎゅっと寄せて、どこまでも青い目を伏せる。

エマは深く溜息をついた。
他称される程に、頭が良いのも考えものだと思う。
私はこの国の行く末を、きっと、父よりも、ヒューよりも、ソフィア様よりも、正しく深く予感しているだろう。
そんな気がする。

人は争う。そうして時代は繰り返し、新しくなる。

過去の傷を背負ったまま。

本人は気付いていないけれど、その憂いを帯びた瞳は、黒を纏い旅する父に限りなく似ていた。

## 9（十人十色）（前書き）

訪問者の例（甘味狂）

## 9（十人十色）

世界最高峰、最大、最古を誇る「ソフィアの大木」には、数多の知恵、知識、英知が集結している。友人である男性司書ヒュー・コリンに言わせると情報の宝庫。彼は情報マニアだ。せき止められることを知らぬ賢者達の知識欲はこの場に向けられる。

そんなソフィアの大木には、様々な人が訪れる。
今回は一風変わった訪問者をご紹介しよう。

エマ・セシルはその日、カウンター当番だった。
本の貸し出しと返却を確認する役目だ。

エマは昔からよく図書館に来て本を借りていたので、カウンターとは馴染み深い。外側から「お願いします」と言っていた立場から内側で言われる立場に変わった事は、エマにとって少し嬉しい事だった。それは皆が憧れるソフィアの司書になったことを、誇りに思っていたからだ。

ふと、甘ったるい加工された苺の香りがする。

「　これおれがいひあふ　」

口の中に大きな飴玉があるらしい。喋る度に赤色がちらちらと見えた。此処は飲食はオススメできないのだが――むしろ禁止だ――飴ならばまぁいいだろうということになっている。入れないゾーンはあるけれど。

えらく舌足らずなのは、口の中にそれがあるからか。

はい、と返事をして貸し出しの手続きをしていると、なるほど香りがすごい。キツイ香水レベルだ。苺、苺苺苺…

若い男性からこんなキツイ甘い臭いがするのも初めてだ。

「あの！そこのアナタ？」

後ろから不機嫌で神経質そうな声が聞こえる。エマは心の中で深く溜息をついた。

面倒なことになりそうだ。

この声の主はコーネリア女史。司書暦６年。今年の４月で３４歳になった。彼女は少々頭の堅いところのある人間で、規則を重んじる。そして賢者の民らしく英知を誇りに思うため、知識の詰まっている本を愛する。

つまり。

コーネリア女史はソフィアの大木での飲食を一切禁止にすればいいと思っているのだ。

「確かに此処は飴やガムくらいならばとそれくらいの飲食を許されていますわ。しかし私はソフィアの大木にある本が汚れてしまう可能性がゼロではないのならば許しません！日々許せないことだと主張しているのにも関わらず規則が作られないのは非常に残念だと思っております。だからこそこの様に注意をするのですわアナタ！その飴を吐き出しティッシュに丁寧にくるみすぐ捨ててください！」

「何処で息継ぎしてるんですかコーネリアさん」

「セシルさん！私は今こちらの方にお話しているのです。それにアナタ、セシルさん。そもそもアナタが注意して下されば良かったの

ですわ！」
「いや飴くらいは構わないでしょうやっぱり。気をつけて頂ければ。」
「その気の緩みが本を汚す！アナタ天才だとか言われてチヤホヤされているからって…！！」
「そういうつもりはありませんが…」
「いいえ、今はアナタにこんな話をしている時ではありません！アナタです、アナタ！ほらティッシュは此処にあります！」
「嫌でふよォ、ほく、ああいおろはれへあいろおひふからいんでふよォ」
「何言ってるかわかりません。ほら、その飴玉を出してください！」
「嫌でふってあ…ん、ぐッ！？」
コーネリアさんは決して悪い人ではない。多分。だが苛々してると見境がなくなる為、強硬手段に無理矢理吐かせにでた。
「なに…、」
「全く！自分でさっさと出してくだされば良かったのです。」
「なにするんだよ」
「本を大切にして頂く為の行動ですわ。お許しくださいまし。」
「な・に！するんだよォォォォ！！！」
彼は高らかに叫び声を上げた。
すごく印象が変わる。さっきまではぼんやりした青年みたいな感じだったのに、今や顔を真っ赤にして怒鳴り散らしている。
「無理矢理って何だよ僕の言い分は聞かないっての！？クソッふざけるな！！甘いものないと落ち着かないんだよ僕は！常に口の中にお菓子がないと！とびっきり甘いの！！それを…！それをお前は！

！何なんだよお前ェェェ！！むかつく！むかつくむかつくむかつくッ！！」

絶叫である。コーネリア女史も呆然。

暴れだしたその男は他の司書達に取り押さえられ本たちには被害はなかったのだが、この後コーネリアさんも無闇に注意しなくなった。オチが不十分な気もするが、世の中には色々な人がいるということでこの話は終わらせて欲しい。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4858e/

---

ソフィアの大木にて

2010年10月9日01時31分発行